

音楽を楽しむ児童の育成

ー金管バンド部の活動を通してー

愛知県蟹江町立新蟹江小学校

教諭 岡本 裕嗣

1 はじめに

蟹江町は、愛知県の西部の海部地区にあり、水郷の町といわれているように、蟹江川や日光川、善田川など多くの川が流れている。本校は、創立130年を超える伝統のある学校であり、児童数約300名、16学級の中規模校である。校区の南側は水田稲作を中心とした農村地域、北側は近鉄名古屋本線や国道一号線が通り市街地化の進んだ地域となっている。

部活動は、陸上部やサッカー部、バスケットボール部、駅伝部、自転車部が活動を行っている。金管バンド部は、年間を通して活動を行っており、4年生から6年生まで、男子児童3名、女子児童26名の合計29名で構成されている。

2 活動の実際

(1) 年間計画

活動月	主な活動内容
4月	昨年度より継続参加児童（5・6年生）練習開始
5月	陸上部壮行会（本校伝統の部活動応援歌を演奏） 新入部員募集（4～6年生）、担当楽器決め
6月	基礎練習・曲作り（今年度の運動会で演奏する曲） 管楽器講習会参加
7月	マーチング練習開始 マーチング講習会参加
8月	ドリル演奏練習
9月	校内運動会にてドリル演奏
10月	アンサンブルコンテストに向けて練習開始 サッカー部・バスケット部壮行会
11月	アンサンブルコンテスト メンバーオーディション
12月	アンサンブル講習会参加
1月	アマアンサンブルコンテスト 参加
2月	楽器・音楽室の後片付け 部活期間終了

例年、平日は火曜日～金曜日の授業後に30分程度練習を行ってきた。今年度は、4・5月と10月～12月の期間は授業後の練習を行わず、2時間目の休み時間と昼の休み時間に練習を行った。

(2) 活動の様子

○校内運動会（9月24日）

運動会では、毎年ドリル演奏を披露している。例年、前年度のアンサンブルコンテストで演奏した曲にコンテをつけて演奏している。そのため、卒業生も多く来場し、後輩たちを応援してくれている。5月の陸上部壮行会後から練習をしてきているので、本番前も楽しそうに音出しをしたり動きの確認をしたりして、リラックスした様子だった。

本番は、昼食後のプログラム1番。前には来賓や保護者、後ろには全校児童がいる中、楽しそうに2曲の演奏を行った。



【運動会でのドリル演奏】

○アマアンサンブルコンテスト（平成29年度1月28日）

運動会が終わるとすぐに、新しい2曲の楽譜を配付し、アンサンブルコンテストに向けた練習が始まる。本校は例年、10人1編成を2チーム作り、コンテストに出場している。児童は、オーディションに向けて個人練習を行うが上級生は自分の練習に加え、下級生の様子も気にしながら練習を行っている。

メンバー決定後は、A・B・Cの3チームに分かれ、A・Bチームはコンテストに向けて、Cチームは次年度の運動会に向けて2曲の練習を進めていく。



【アマアンサンブルコンテストの様子】

3 おわりに

例年、夏休み練習を中心に、十分な練習時間を確保することができていた。本年度は、一部の期間で午後の練習を行わず休み時間に練習を行ってきたが、児童にとって負担が大きかったように感じた。前年度アンサンブルコンテストで使用した曲を次年度の運動会で使用することについては良い面・悪い面あるが、練習時間が減ってきていることやコンテストに出ることができない児童のやる気を高めていくためには良い手段ではないかと考えている。

部活動の縮小で本校の金管バンド部は本年度で廃部となる。今年度まで金管バンド部として音楽の楽しさを感じ、全校へ伝えてきた児童は多い。今後、学校教育の中に管楽器がどう位置づけられていくのか、音楽の楽しみ方についてどういう方向でいくのか検討していきたい。

『地域になくなくてはならない金管バンドを』掲げて16年

三重県松阪市 松阪ハーモニックジュニアバンド

指導者代表 小島 誠伺

1. いま思っていること

松阪市内の小学校で唯一スクールバンドとして最後まで活動していたバンドがあり、「4月からは指導者がいないからできない。」と告げられたのが3月末でありました。4月からも活動したいと残った子どもたちが「続けてやりたい」と声を上げ、その必死な声を聞き保護者がいろいろな方面に働きかけて条件を整えて、保護者が主体に運営していく社会教育団体として進める覚悟を決め立ち上げました。

それが、松阪ハーモニックジュニアバンドが出来たきっかけでした。

始めは1つの学校の児童だけでしたが、仲間は多いと楽しいということで、現在では、市内の6校の児童が集まってきています。門戸を広げてすべてやりたい気持ちをもつ子どもを仲間に入れてくれています。保護者会も頻繁に開き意思疎通もスムーズにされています。しかも、全員積極的に活動を支えています。

卒団していく子どもが中学校も3、4校に分かれますが高校になると、それぞれの高校の吹奏楽部で「また、一緒になったね。」と小学生の時の友達と楽しくレベルアップした音楽活動しているのを、ほほえましく見守っています。

今、国中で働き方改革が叫ばれています。学校における働き方改革の議論の中で部活動の見直しが検討され、もうすでに実施されているようです。一昨日の県のアンサンブルコンクールで私が携わっていた同じ係の中学校の先生が、授業が4時に終わり、「さあ、クラブだ」と生徒も、顧問の先生も練習を始めても「4時30分になったら生徒を下校させなさい。」とのことでした。

限られた時間内で、効果的な練習や子ども同士の心のつながりをどうしていけばいいのか指導を続ける者が子どもたちと話し合っただけで納得し自分なりの方法を見い出していかなければならないのではないかと考えます。

この実践事例集は、全日本小学校管楽器教育研究会でも東海北陸ブロックが広域のブロックとして指導者としてお互いがどんな実践して子ども達が、管楽器に親しみ、音楽の楽しさを仲間と感じているかを交流するツールとして続けてきたものと認識しております。他のブロックにはない宝物だと誇りに思います。今年も、事務局長様中心にお世話いただいて各県からの原稿を整理し発刊されます。日常の校務に重ねてバンド指導を行いつつ、この編集・発刊の作業にご苦労されています。感謝しブロック内の益々の実践に生かしたいものです。

● 全日小管研企画委員が浜松のJAPAN BAND CLINIC 第50回小学校のスクールバンドで役立つ講座を毎年企画しています。是非ご参加を！

2. 16年目の新たな実践とその後の方向

その年の実践の中に新しい取り組みを入れながら 2.3 年先を見越しての実践を、保護者とともに共有し歩むことを大切にしたいと考えています。

○2018年の新たな取り組み

音楽は 人と人を繋ぐ力があるそれをプレーヤーの演奏水準の差があっても音だけでなく、他の要素によって訴えられると思います。

4月に原発事故で被災した福島の子どもたちに、松阪の波瀬の緑豊かな飯高地域での3泊4日のキャンプでの交流を波瀬むらづくり協議会の方が計画されました。そこでウェルカムコンサートとその後の3日のいろいろな企画がある交流を依頼されました。

子ども達や保護者に相談し参加決定し、すぐハーモニックだけでなく、演奏を地域2校の子どもトランペットクラブと飯南高校の吹奏楽部に依頼し、歓迎する曲の選定などを話し合い取り組みました。

「たくさんの思い出を作ろう」と子ども同士や地区住民との豊かな交流となりました。この場で〈未来に響け〉三重とこわか国体・大会テーマ曲を演奏しました。

○2019年以後の取り組み

例年活動している、松阪市企画のお祭りのオープニング演奏、老人介護施設、障がい者施設、幼稚園・小学校などでの演奏会、地元演奏会への出演コンクールへの出場、16回目の定期演奏会(高校・中学校・地域一般演奏団体との共演)など年間地域からの要請に土曜日、日曜日に出向いています。

音楽が好きな子供たちも、日常は学習塾、スイミング、レスリング、英会話、ピアノ教室など多忙な生活を送っています。出演要請も年々増えています。これからは、毎年要請がある施設などにも、お願いして2年に1回にこだわるなどにしていかないと『楽しい』『喜んでもらえる』とのことでは練習が追い付かない状況では地域で楽しみに待って見えるお客様に失礼になると考えています。

しかし、子どもの人生の中で、この年に輝かないとチャンスがないと思うことはやり遂げたいと思っています。県の吹奏楽連盟総会の場で、2021年三重とこわか国体・三重とこわか大会のテーマ曲が発表されました。この総会で3年後ことではあるが、小学生も各市町での競技会場での役割が生じると思い、「金管バンドでも演奏できる楽譜を作ってほしい」と要望し、早速作っていただきました。もう既に公の場で3回演奏しています。

●このような写真も無い、カットも無い、おそらく読んでももらえない紙面になってしまいました。日常の活動詳細については、HP【松阪ハーモニックジュニアバンド】SNS インスタなどにアクセスしてください。

富山県の小管研の活動について

富山市立水橋東部小学校
校長 川添 等

1 はじめに

富山県小学校管楽器教育研究会は昭和43年（1968年）に発足した。今年度でちょうど50周年を迎える。管楽器の演奏を通して、よりよい音楽に親しみ、心から音楽を愛好する子供の育成を目指すとともに、指導者の技術の向上を目指した研修会の実施や情報交換、資料紹介、他県との交流を行ってきた。発足当時、県内での管楽器保有校は10校程度だったが、子供たちの豊かな音楽性と情操を育む活動として認知されるに至り、多くの学校で取り入れられるようになっていった。10年後の1978年には77校とほぼ県内の小学校のほぼ1/3（当時）が管楽器を保有するに至った。その後、県内の東部地区と西部地区に分かれて活動を行っていた時期を経て、昭和62年からは再び県内が一つになって活動を行い現在に至っている。

会の発足翌年1969年に10校が参加して、第1回交歓演奏会（現在の小学校バンドフェスティバル）が富山市公会堂で開催された。その後、交歓演奏会は、昭和63年（1988年）参加校32校、参加人数1391名を数えるまでになっていった。その後、児童数の減少、学校の統廃合、指導者の世代交代、また、昨今の働き方改革による活動時間の縮減等から参加校、参加人数の漸減が続き、平成12年（2000年）には28校980名、平成22年度（2010年）には21校712名、平成29年度（2017年）16校478名、平成30年度は県内での他の行事と日程が重なったこともあるが、11校307名と過去最小の参加校・参加人数となった。

小管研への加盟も年々少なくなっており、今年度は14校である。この実践事例集にも過去15校17実践を紹介したが、そのうちの半数の団体が廃部もしくは研究会への不参加となっていることも寂しい限りである。

2 富山県小管の活動について

小管研では、前項の目的の元、いろいろな活動を行ってきた。今まで行ってきた活動は、指導者講習会、指導者懇談会、初心者奏法講習会、アンサンブルコンサート、ディレクターズバンド、合奏講習会、小学校バンドフェスティバル、スクールバンドパワーアップ派遣事業等である。その時々々の要請に応じて事業を企画・運営してきたが、現在、行っている事業について紹介する。

①管打楽器奏法講習会

毎年5月に、初心者の子供を対象にした講習会で、楽器の扱い方から実際の練習方法まで、日頃の練習に役立つために、パートごとに講師がついて指導を行う。当初は木管楽器も受け入れていたが、受講者減少より現在は金管楽器と打楽器のみ講習を行っている。専門的な知識をもった教員、指導者がいないバンドからはとても好評な事業である。



②指導者講習会

バンド指導者のレベルアップを目的にして、講師を招いてモデルバンドを使った指導を行っている。スクールバンドをモデルに行う実践指導は、なかなか専門的な指導者から指導を受ける機会のない教員らから好評である。講師を招かない年度は、役員の体験談を若い先生たちに伝え、指導方法や運営の悩み等に答える懇談会を行うこともあった。

③スクールバンドパワーアップ派遣事業

スクールバンドに県小管研から役員を派遣して、合奏指導やパート指導を行うことで、表現力の向上を目指し、バンドをより楽しむ子供を育てるという目的で5年前から始まった。年間5～10校程度から要請があり、夏休み等に、各校に1～2回出向いて指導を行っている。指導を受けたバンドは、バンドフェスティバル等の発表で、その演奏技能や表現力の向上等、指導の成果を感じ取ることができる。

④小学校バンドフェスティバル

県小管の中心的な行事で今年度で46回を数える。現在は富山市芸術文化ホール（オーバードホール）、富山県民会館が主な会場となっている。このフェスティバルでは、本県のスクールバンドが一堂に会して、日頃の練習の成果を発表し合う。多くのバンドがこのフェスティバルを目標に年間の練習に励んでいる。フェスティバルでは、お互いの演奏を聴き合ったり、4～5名の講師の先生方から各校の演奏について講評をいただいたりもしている。前述のように参加校、参加人数がかなり減ってきているのが課題である。



3 今後の課題

児童数の減少や指導者の世代交代、学校行事のスリム化、運営費の調達等、これからのスクールバンド活動が持続可能なものであるためには乗り越えなければならない壁がいくつも存在する。そうした壁を乗り越えた例や乗り越えるヒントになる事例があるので紹介したい。

児童数の減少については、本県では「婦中っ子バンド」という学校単位にこだわらず、地域の複数の小学校の子供たちが合同で活動を行っているバンドがある。また、楽器演奏経験のある保護者や卒業したOBやOGとともに活動している学校もある。こうした今までの枠にとらわれない団体構成の在り方も必要になってくるであろう。

指導者の世代交代については、楽器の演奏指導という特別な技能が必要なため、誰にでもできるというわけではないので、指導面については楽器の経験のある保護者や地域の方に全面的に委ねている学校もある。そうした学校では、保護者が中心となった保護者会がバンドの運営の中心となっているため、教員に過度な負担を強いることはない。学校の担当教員は活動時間や活動場所、児童管理を中心に指導に当たっている。

バンドフェスティバルについては、子供たちにも聴衆にも魅力ある発表会にすることが、参加校や参加人数を減らしていかないために有効であると考えている。そのための方策として、子供たちの演奏ばかりでなく、今後は、ゲスト演奏者（例えば、県内には高校生によるレベルの高いオーケストラやバンドがたくさん存在する）を招いたり、ディレクターズバンドによる演奏をしたりすることも考えている。

管楽器のもつ豊かな響きと美しい音色は子供たちの感性を育むとともに、友達と一緒に活動することは、音楽の技能面を伸ばすばかりでなく、豊かな心も育てていく。こうした管打楽器による音楽活動を通して子供たちの豊かな成長を願うばかりであるが、これからのスクールバンドを取り巻く環境は決して明るいとは言えない現状ではある。富山県小学校管楽器教育研究会が、子供たちの演奏技術や指導者の指導力向上の一助となることを願っている。